

研究テーマ：「話すこと」「書くこと」の表現力を高めるための指導

所属 安田町立安田中学校

氏名 那須 磨知子

RG JH5

1. 研究の背景

全校生徒82人の小規模校である。生徒は全体的に落ち着きがあり、素直で何事にもまじめに取り組む姿勢がみられる。英語学習に対しても、意識が高く授業も熱心で、向上心もあり家庭学習も定着している。ただ、保育園からクラス替えのない集団で、仲間に対する固定概念も見られ、自主性、積極性に乏しい面がある。また、自己を表現する力が弱いことから、本校では「豊かな表現力のある生徒の育成」を研究主題に、行事や授業を通じて実践を重ねている

今回、3年生を対象にアクション・リサーチを実践しながら、生徒たちに「話すこと」「書くこと」の表現力を高める指導方法を研究していきたい。

2. リサーチ・クエスチョン

聞き取りや読解をどのように発展させていけば、「話すこと」「書くこと」の表現力を高めることができるか。

3. 予備調査

予備調査1 アンケート結果 (5月と9月に実施)

「英語学習の中でどんなところが特に難しいと感じていますか。」というアンケートを行った。

結果、自己表現をするのに最も重要になる「話すこと」「自由作文」が難しいと感じている生徒が多いことがわかった。

予備調査2 CRT 分析結果 (現3年生 31名) H16年4月28日実施

領域別得点率	本校	全国	全国と比較
聞くこと	78.8	65.2	+13.6
話すこと	82.5	72.1	+10.4
読むこと	76.0	62.6	+13.4
書くこと	78.9	55.4	+23.5

予備調査1・2から CRT はどの領域も全国と比較して高いレベルであったが、アンケート結果から、半数あるいは半数以上の生徒が「話すこと」「書くこと」に関して、一番難しいと感じている。生徒たちが自信をつけるための取り組みが必要である。

4. 仮説の設定

仮説① 「話すこと」はまず話し手の言葉を「聞くこと」から始まる。リスニングの力を伸ばすことによりスピーキング力も伸びる。

仮説② ペアワークにより聞いた内容を相手に伝え合う活動を行うことによりリスニング・スピーキング力とも伸びる。

仮説③ 「話すこと」は自分の考えを言うことである。自己表現文を書かす事により、スピーキング力も伸びる。

5. 計画の実践

仮説① 英検3級レベルのリスニング・ディクテーションを行う。

聞き取りのポイントを与え、1回で聞き取らせる。答えを確認した後、聞き取った教材の dictation をする。聞き取り教材のスク립トにいくつか空所を作り、3回で書き取らす。答えを確認した後、読みと意

味の確認をする。

仮説② 30字程度のパラグラフの英文（CD or ALT）を聞かせる。生徒はメモを取りながら聞く。次に、ペアワークで、1人が聞き取った内容をメモを見ながら相手に英語で1分以内で伝え、聞く方は自分のメモを見ながら話のポイントをつかんでいるかチェックする。その後、聞き役が自分の聞き取ったことと相手が言ったことをまとめて45秒以内で英語で話す。

仮説③ 週1回 英語で日記を書く課題を出す。（5文以上書かせてくる）

6. 実践の結果

仮説① この活動を2年の2学期から継続して行っている。はじめの頃は、1回で聞き取れる生徒が数名しかいなかったが、今ではほとんどの生徒が1回でポイントを聞き取れるようになっている。また、**dictation**でも最初の頃は、空所を埋めることだけに集中して間違いが多かったが、前後の文脈を考えて答えることができ始めた。特に、時制・人称の間違いが少なくなった。文法の復習にも役立っている。

仮説②

- ・ 学習形態をペアにしたため、英語が苦手な生徒の参加意欲が高まり、間違いをおそれず生き生きとした活動になっている。
- ・ 聞き取ったことを相手に伝えなければならないので、今まで以上に集中して聞くようになった。
- ・ 自分の言葉で言い換えて話さなければならないので、話す訓練になっており、英語を話すことを恥ずかしがらなくなった。また、主体的に活動するようになった。

仮説③

- ・ 毎回評価することによって、文構造を意識して書くようになった。
- ・ ALTが前置詞・冠詞をチェックしてくれることにより、意識して書くようになった。
- ・ 辞書を利用する生徒が増えた。
- ・ 新しく習った文法事項を使って文を作る生徒が多く、定着がよかった。特に、後置修飾・関係代名詞を習得した後は、表現が広がり、豊かになった。
- ・ テストでの自由作文の正解率が上がった。

7. 結果の検証

「話すこと」「書くこと」を意識した授業を常時実践することにより、生徒たちの英語学習に対する意識が確かに高くなった。これは、受動的になりがちな英語の学習を能動的に変化させたためではないかと考えられる。

また、例年より英検への呼びかけに対しても積極的で、11月までの段階で31名中24名が3級以上（内2名は準2級合格）を取得している。なお、学力診断テスト（5回実施）のリスニングテストの正解率も常時86%以上である。話す機会をもっと増やし、表現する楽しさを知らせていく活動を続けていけば、「話すこと」「書くこと」の苦手意識を払拭することができると思う。

8. 成果と今後の課題

アクション・リサーチをすることによって、具体的な課題が見つかり、次のステップへ進むことができたことは大きな成果であった。特に「話すこと」の指導に関しては、「難しい」「無理」とどこかであきらめていたが、このプロジェクトを通して生徒の思い、要求を具体的に知り、少しでも生徒の願いを叶えたいと考え、研究を重ねた。

試行錯誤しながら様々な活動を生徒と共に目標を設定して行った結果、生徒たちはどの活動にも積極的に参加し、生徒と教師が協力して取り組む共同体のような連帯意識を持つことができたことは、英語教師として大きな喜びであった。この取り組みを通じ痛感したことは、生徒が進んで授業やコミュニケーション活動に参加できるように「安心して学べる場を提供すること」と「英語力に自信を持たせる」ことが重要であるということである。

これからも、今年学んだことを糧に「絶えず学び、絶えず工夫し続ける教師」であり続けたい。そして、生徒から「英語の授業が待ち遠しい」といつも思われる授業を実践していきたい。